

平成27年度 佐賀市立久保泉小学校 学校評価結果

1 学校教育目標		
元氣あふれる学校 ～夢を持ち進んで学ぶ、心やさしい子どもの育成～		
2 学校経営ビジョン		
(めざす学校像) 「あたたかさに満ちた元氣あふれる学校の創造」 ・子どもの学ぶ意欲を高め、学力の向上をめざす学校 ・子ども自主的な活動を促し、がんばりを認める学校 ・子どもの良さを見つけて賞賛し自己肯定感を高める学校	(めざす教師像) 「たゆめぬ自己研鑽」 ・子どもを温かく認め、ともに汗を流す教師 【師弟同行】 ・子どもの個性を見取り、一人ひとりのよさや持ち味を生かす教師 【卒隊同儕】 ・自分を磨き、情熱と使命感を持った教師 【率先垂範】	(めざす児童像) ○かこしい子 ○やさしい子 ○たくましい子 ・意欲を持って学習に取り組み、誰かな学力を身につけた子 ・自分の考えを表現できる子 ・家庭学習や読書の習慣が身についている子 ・思いやりの心を持ち、友達と件良く活動する子 ・よいことを進んでする子 ・きまりやマナーを守る子 ・めあてを持って最後までがんばる子 ・元気に気持ちよい楽しいさびができる子 ・健康で安全な生活を実践できる子
3 本年度の重点目標		
①学力向上を図る。 ・思考力や読解力、コミュニケーション能力を高める。 ・校内研究に「学び合い」を取り入れ指導法の改善を図る。 ②雄飛学園の教育を推進する。 ・開発的生徒指導(出番・役割・承認)を推進する。 ・幼保小連携や9年間を見通した小中連携を推進する。 ③命と人権・同和教育を推進する。 ・一人ひとりの子どもと理解と心の教育を充実させる。 ・特別支援学校の子ともへの支援体制を強化する。 ④3つの「あ」(あいさつ・あんぜん・ありがとう)の推進 ⑤子どもへのまなざし運動と市民性を育む教育を推進する。 ・活動や行事の中で子どもの出席を広げていく。	4 前年度の成果と課題 ・前年度は「学力向上と学習習慣の定着」「読書活動の充実」「読書活動の充実」「ICT利活用教育への教職員へのスキルアップ」「雄飛学園構想に基づいた小中連携教育の推進」「人権教育の充実」「本年度の学校教育・経営ビジョン・重点目標の周知徹底」「危機管理体制の整備」において、確かな成果をあげることができた。しかし、すべての児童や保護者の意識や行動を改善するまでには至っていない。また、「基本的生活習慣の育成」「特別支援教育の充実」「環境教育の充実」など、それぞれに取り組みを行い、改善を図ったもののまだまだ課題等がある。全職員で共通理解を持ち、協議・検討実践する必要がある。 ・学校評価として、取り組むべき評価項目であるかどうかを学校評価検討委員会で協議した。雄飛学園教育構想における三部会や校務分掌担当当事者による実践状況の振り返り(成果や課題等)の報告を通して、教職員全体への周知徹底を行うことができた。また、評価項目についての全体的な総括を行い、その都度、改善や修正を行うことができた。年2回行った保護者や児童のアンケートについては教職員全体で協議し、見直し等を行うことができた。 ・課題としては、学校教育目標の具現化を目指して、児童自らが意欲や課題を持って基礎学力や学習習慣を身に付けさせていく手立ての構築に努めていかななくてはならない。自分の目標に向かってめあてをもって努力していくように、児童が安全に安心して学んでいる教育環境の充実を図る必要が考えられる。	

3 目標・評価						
①学力向上を図る						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	担当	評価及びその理由 成果と課題
教育活動	●学力向上1	学力向上と学習習慣の定着	・『学び合い』の考え方を基礎として、「思考力」「表現力」を伸ばす授業を行う。 ・算数科で、市販テストの3分の1の単元で全員70点以上を目指す。	・算数科において、児童の発達段階に合った「思考力」「表現力」を育成する『学び合い』の進め方を校内研として研究を進めてきた。これまで培ってきた学び合いを基礎として、授業の流れや形態を工夫して、研究を進めた。 ・算数科における二極化の解消や個に応じた支援を行うために、3年生以上では少人数授業、1・2年生ではT.T授業を行った。 ・思考力育成のために、具体的な操作活動に取り組ませたり、具体物や半具体物を提示したり、電子黒板を効果的に活用したりすることで、児童が課題をよりイメージして考えることができるようになった。 ・以上の三点を研究の視点の中心に据え、授業研究会を全学年で行うことができた。 ・市販テストでは、二極化の解消を図ることができてきた。また、全領域で全国平均を超えることはできなかったが、橋本クリアーすることができた。特に、技能と知識・理解はほぼ回復することができた。 ・雄飛学園連携により「家庭学習の手引き」を作成し、「学びの強化週間」の実施時期とあわせて、保護者への啓発と家庭学習の充実を図ることができた。	確かな学び部(研究主任)	・(成果) ・学習過程の工夫を図ることで、子どもたちが見通しをもって主体的に授業を進めるようになった。また、本時のめあてを子どもたちと考えさせることによって、何を学習するのがより明確になった。 ・少人数やT.Tの授業形態を取ることで、「どんなコース」は子どもたちが主体的に学ぶよう、教師は補助的役割に立つことが多かった。「ゆくりコース」では、めあてをしっかりとつむまで既習事項をじっくり振り返ったり、「一人一人ヒートを出したりしながら自分の考えを持つまでの時間を大切にしたり。個の実態に合わせた教材や教具、ワークシートを準備することで滑らかな学習活動を進めることができた。 ・具体物や半具体物、図や数値など思考の助けとなる教材を工夫することで、課題に対するイメージが浮かび、関心が高まり理解につながった。 ・ICTの効果的な利活用では、問題を視覚化したり動かしたりすることが子どもの視界に訴え効果的であった。また、黒板カメラによってスクリーンが電子黒板に提示されることで子どもたちが考えを説明するが容易になり、聞いている子どもたちも理解しやすくなった。 (課題) ・授業の後のほうになると時間が足りなくなることが多かった。時間配分の工夫が必要である。 ・学び合いの形態と内容をほきりさせる必要があり、思考だけでなく、表現に対する支援が必要である。 ・個人室に順じての準備が難しいため、デジタル教科書だけでなく、パワーポイントやインターネットの有効活用などより効果的なデジタル教材の準備が必要である。 ・学習習慣や学習規律の指導が必要であるとともに、子どもたちの実態から、特別支援部会との連携が必要である。 ・校内研究の実践を継続して全職員の共通理解の下で行い、児童の思考力や表現力を伸ばす取組をしっかりと考察していく。 ・児童が表現したり、思考したりする場面を授業の流れの中の的に確に設定することで、経験を積ませて抵抗感をなくさせていく。
	●学力向上2	読書活動の充実	・個人の貸し出し数を低学年120冊、中学年100冊、高学年80冊以上で、80％達成を目指す。また、家で読書をする習慣をつける。	・読書活動を活性化させるイベントや企画、各教科との関連読書のタイアップ活動をする。 ・家庭と連携(まなざしカードや「雄飛学園メソッド」、家庭学習等)して、家庭での読書の習慣をつける。 ・「図書館クイズ」を増し刷りして、図書館に常備する。	確かな学び部(図書教育担当)	・(成果) ・全校一人平均が200冊を超えたことはすばらしい結果と考える。 ・「まなざしカード」のチェック項目に入れてもらったことにより、家庭での読書を意識するようになった。 ・「貸し出しスタンプカード」の導入により貸出数が増えた。 ・新しい本は、やはり魅力があり、たくさん購入したことにより、多くの児童が図書館に足を運ぶようになった。 (課題) ・本の親しみが薄れたが、「本を読むことは嫌いではない」が、「休み時間は他のことをしたい」と考える児童が多い。図書館に行き時間をどう確保するかが課題と考える。文字量が多くなる高学年向けの本を敬遠しがちな児童もいる。 ・貸出冊数に意欲が向きがちなため、早く読み終えることができる本を返却図鑑が見られた。 ・選書が同じジャンルの読みやすい本に偏重しがちである。 ・授業での計画的な図書館活用ができなかった。 (改善策) ・ボランティアの方にだけ任せず、担任等による読み聞かせに取り組んだり機会を捉えてブックトークや読書30秒の紹介を行ったりすることで、読書の質を上げる。 ・週末の本持ち帰りの返送を当番にして、持ち帰りを意識化を高める。 ・教科書が終わったので図書館活用の年間計画を修正することで、国語科だけでなく、他の教科でも図書館の活用を勧める。
教育活動	ICT利活用教育の推進	ICT利活用教育への教職員へのスキルアップ	・教員のICT利活用指導力(教材研究、授業、児童、情報モラル)の向上を図り、実践的な教育活動ができるように年3回以上職員研修を実施する。	・「情報教育推進リーダー」を中心に、機器の取り扱いや、授業での活用、児童への指導方法などの体験的な職員研修会を行う。また、必要に応じて、講師を招いて、ICT利活用教育の目的や内容、情報モラル等についての研修会も実施する。	確かな学び部(情報教育担当)	・どの学年でも、毎時間のように電子黒板を活用して、授業での利活用ができている。デジタル教科書の導入により、簡単な操作での資料の提示、図やイラスト等の提示を速して黒板等での授業に反映付けできるようになった。また、特別教室などでの活用も実施されている。 ・校内研でもICT利活用の視点を掛け、授業研究会でもICT利活用の研修を行った。 ・どの学年でも活用できていることや多忙化のため、ICT利活用に関する身に研修が少なかった。 ・職員研修で情報モラル教育の必要性を確認し、4年生以上では情報モラル教育を実施した。

②雄飛学園の教育を推進する						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	担当	評価及びその理由 成果と課題
学校運営	○小中連携	雄飛学園構想に基づいた小中連携教育の推進	・「確かな学び部」「すこやかな育ち部」「豊かな心部」の3部会各々で各校の担当者間の連携を深め、学力面と生活面、心身の両面からの合同の研修や授業研究会を定期的に行ったり、学習習慣や規範意識を身に付けさせる取組を行ったりして雄飛学園構想の基礎をより強くする。	・雄飛メソッドに基づいて、学習習慣、規範意識の定着に向けて共通した取組を推進する。 ・学力向上、生活指導、教育相談、特別支援教育、人権・同和教育の各部会で、三校で情報交換をしたり、合同研修会を持ったりする。	教務主任	・新しく赴任した教員に第1回目の雄飛学園研修会を通して目的と経緯を説明し、これまでの取組の成果と課題を確認した。また、今年度の3校の職員同士の顔合わせを定期的に行なった。 ・雄飛学園教育構想としての「確かな学び部」「すこやかな育ち部」「豊かな心部」の3部会に分かれて話し合いを持ち、3校共通した取組についてより具体的な内容の話し合いができた。 ・教育相談部が中心となって、夏期休業中に、スクールカウンセラー黒木先生を講師として招き研修会を催した。講義後、小グループに分かれて課題についてロールプレイをして中9年間を見通した生徒指導について共通理解を図ることができた。 ・全職員で全学年中学校、金立小学校の研究授業を参観し、今後の指導に参考になった。 ・「確かな学び」からの提案で、「雄飛学園まなざしカード」をもとに3校の学校と保護者が共に考えていく共通項目を実施した。 ・雄飛学園メソッド(3校小中一貫した学習規律や規範意識確立の方針)の策定に配布した。また、雄飛学園合同研修会で雄飛メソッドに沿って、各校の取組を情報交換し、共通した取組や参考にする取組を話し合った。
	③命と人権・同和教育を推進する	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	担当	評価及びその理由 成果と課題

教育活動	●健康・体力づくり	基本的な生活習慣の確立	・こまめに手を洗う習慣を身につけさせる。 はやね ・早起き・朝ごはんの習慣化を図る。	・こまめに（20分休み・体育の後など）手を洗う習慣を身につけさせるために、強化週間を設ける。 ・まなざしカードを使って、実態を把握し、リズムある生活を身につけさせるために、学級指導を行う。（学期に1回）	すこやかな育ち部（体育主任、養護教諭、食糧担当）	B	・給食前の手洗いはもちろんだが、運動場など外から教室へ戻ってきたとき、体育の授業のあとなど、よく手を洗うようになった。手洗いの習慣化ができてきているように感じる。 ・健康委員会を中心に、手洗いの大切さ、手洗いの方法などを呼びかけた。ポスターにして手洗い場に掲示したりするなど、手洗いに促す工夫ができた。 ・健康フェスタを開催し、そのなかで正しく手洗いができなくなってきた子がチークとあるようコーナーを設けた。コーナーにはほとんどの児童が訪れ、自分の手洗いの状況を確かめた。 ・健康委員会の指導で、手洗いを習慣化し、全校児童に向けて手洗いをしようと呼びかけを行った。 ・手洗いに促して手洗いができなくなった児童は、1年間を通じて取り組み続けたことができた。	・手洗いに促して手洗いができなくなった児童は、1年間を通じて取り組み続けたことができた。
		体力の保持増進	・進んで楽しく運動する習慣を身につけさせる。	・マイペースマラソン、縄跳び運動（短縄、長縄）を全校的に実施する期間を設ける。 ・自分の身につについて知る期間を設ける。健康フェスタ（仮称）		B	・「走ろうさこう会」に向けて、体育委員会の呼びかけということでマイペースマラソン週間を設けた。積極的に走ることができたよう。発達段階を考えた回数記録カードを作って配布した。 ・マイペースマラソンの後、周回数を集計し、全校に知らせるようにした。 ・健康フェスタを開催し、そのなかで正しく手洗いができなくなってきた子がチークとあるようコーナーを設けた。コーナーにはほとんどの児童が訪れ、自分の手洗いの状況を確かめた。 ・健康委員会の指導で、手洗いを習慣化し、全校児童に向けて手洗いをしようと呼びかけを行った。 ・手洗いに促して手洗いができなくなった児童は、1年間を通じて取り組み続けたことができた。	・「走ろうさこう会」に向けて、体育委員会の呼びかけということでマイペースマラソン週間を設けた。積極的に走ることができたよう。発達段階を考えた回数記録カードを作って配布した。 ・マイペースマラソンの後、周回数を集計し、全校に知らせるようにした。 ・健康フェスタを開催し、そのなかで正しく手洗いができなくなってきた子がチークとあるようコーナーを設けた。コーナーにはほとんどの児童が訪れ、自分の手洗いの状況を確かめた。 ・健康委員会の指導で、手洗いを習慣化し、全校児童に向けて手洗いをしようと呼びかけを行った。 ・手洗いに促して手洗いができなくなった児童は、1年間を通じて取り組み続けたことができた。
教育活動	●心の教育1	人権教育の充実	・人権意識の向上をめざす	・月1回全校で参加体験型の人権教室を開く。 ・人権週間を12月に設定して人権学習を行い意識を向上させる。 ・いじめアンケートの結果を職員で共通理解しながら該当児童やクラスへの指導に生かす。	豊かな心部（人権、和育担当）	A	・人権週間を12月に設定して人権学習を行い、意識の向上を図り、折に触れて子どもたちに人権を高める意識づけをできている。今年度は、この時期に他学年児童との交流も図れるように「ほかほかの心」を掲示し、思いのこもった「人権カード」に書いてもらった言葉を交わして活動も行った。学年の枠を越えた心温まる交流ができ、人権意識の向上にもつながった。 ・年間を通しての月1回全校で参加体験型の人権教室を開催し、特に自己を振り返って人権感覚を意図できるようにしている。月の担当もきちんと分担できている。 ・いじめアンケートは月1回確実に実施できている。いじめのアンケートの結果を該当児童やクラスへの指導に生かしている。アンケートで気になった事象に関しては、早期に対処し、児童や保護者に安心感を抱かせることができる。	（成果） ・思いやりにつながる「ほかほかことば」を使う児童が多い。 ・学年当初に比べ子どもたちの表情が優しく明るくなってきて、全体的にいい雰囲気ができる。 ・「ほかほかことば」を使う児童が増えている。 ・いじめに発展しないトラブルが増える。 ・個別の支援が必要な児童がいる。 （改善策） ・月1回全校で参加体験型の人権教室を続け、振り返って書いた児童の作文に担任がよく目を通し、作文指導を続けていくことで、人権意識のめ、とげとげ言葉づかいや言葉づかいを促すことができる。 ・人権教室だけでなく、各教科の学習等でも、場面場面のロールプレイングをして、場面に応じた人との係わり方を学習できるようにする。 ・個別支援が必要な児童についても、生徒指導協議会の場で全職員共通理解を図るようにし、様々な場面でも全職員が支援にあたるようにする。
	●心の教育2	特別支援教育の充実（支援体制強化）	・特別支援教育対象児童の共通理解と支援体制強化	・交流学級と連携を密に行う。 ・発達障害についての理解を深める研修を行う。 ・支援会議を計画的に開催する。 ・保護者向けの研修会（講演会等）を開催する。		A	・生徒指導協議会の特別支援教育の中で、障害理解のための研修の機会を持ち、在籍する児童の指導と支援に生かすことができた。また、全職員で情報交換を行い、共通理解を図ることができた。そのことにより、担任だけでなく、校外や生活指導員の先生も必要に応じて支援に参画してくださり、支援体制が強化できた。 ・専門家チームの巡回指導を受けることができ、障害特性や発達段階等について理解を深めることができた。 ・発達障害についての理解を深める職員の研修会を「特別学級の研修会」で実施し、小学校と中学校の共通理解も図りながら充実した研修会ができた。 ・「特別学級の研修会」では、支援を要する児童について情報交換を行ったり、授業研究会に参加して協議を行ったりして、授業研究会に参加して協議を行ったりし、その連携を図ることができた。	（成果） ・校内支援委員会・支援会議は、計画していた以外にも必要に応じて開催され校内支援体制を協議し実施することができた。 ・支援学級以外の児童においても、個別機能検査やを基に児童理解を深めることができた。 ・「特別学級の研修会」では、発達障害についての理解を深める職員の研修会を実施したり、支援を要する児童について情報交換を行ったり、授業研究会に参加して協議を行ったりして中小3校の連携を図ることができた。 （課題） ・保護者向けの研修会が開催できなかった。来年度は、是非実施したい。 （改善策） ・保護者対象にどんな形で障害の現状等を知らせたいのかについて校内特別支援委員会等で検討し、具体的な計画を立てて実施する。
領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方法	担当	評価及びその理由	成果と課題	
教育活動	●小学校低学年の学習環境充実	基本的な生活習慣の育成	（生活習慣） ・気持ちのよい挨拶、返事を徹底させる。 ・チャイムの合図を90％以上守らせる。	・毎月のめあてを月に1回振り返らせる。 ・時計やチャイムに気を付けさせ、時間になだらかに着くようにさせる。	1年・2年（学級担任）	B	・互いが気持ちよく進んで「おはようございます」などの挨拶ができるようになってきた。返事は、進んでできる子が増えたり必要になってきた。 ・チャイムの合図は、95％ほどの児童が守れるようになってきた。チャイム後の音階は、ほとんどの児童ができていた。 ・基本的な生活習慣の確立が、全般的な落ち着いた雰囲気を感じられる学校の雰囲気を作り出している。	（成果） ・進んで自主的に気持ちのよい挨拶ができるようになってきた。 ・チャイムに関わりず、時間を意識して行動できるようになってきている。 （課題） ・はつぱりした声で、児童自ら「気持ちのよい挨拶」がまだできない児童がいた。 ・自分の意思を伝えるための「はい」「いいえ」などの返事を自分から進んでしようとする態度を身に付ける必要がある。 （改善策） ・朝や帰りのあいさつ以外で、より先に進んでほしいと返事を自分から進んでしようとする態度を身に付ける必要がある。 ・自分から進んで「はい」「いいえ」と返事ができるように練習する。
			学習習慣の育成	（学習習慣） ・宿題等を90％以上提出させる。 ・よい話し方、よい聞き方ができるようにする。		・宿題をきちんとしているか担任で毎日チェックする。 ・掲示している基本的な話型、聴型を活用して指導する。	B	・95％以上の児童が毎日の宿題に取り組む提出することができている。 ・各学級の中に数名は話すの方向に向くことができずに、集中して聞くことが難しい児童がいた。 ・発表するときは、「です」「ます」で伝えるようになってきた。
教育活動	○危機管理体制	危機管理体制の整備	・事故〇をめざす。	・地域との連携を密にして安全マップを刷新して活用する。 ・一斉下校時に安全について話す。 ・黄色い帽子と防犯ブザーの携帯を一斉下校時にチェックし、全学級で指導する。	すこやかな育ち部（生徒指導主任、教諭）	A	・名前札、黄色い帽子、防犯ブザーの携帯等については、一斉下校時にはもちろん、全校朝会など、全校児童が集まる時に必ず確認をするようにした。 ・全校朝会の時に、三つの「あ」に関連して生活のめあて、安全マップを活用させ、「110番の家」の所在を明確に伝えた。 ・全校一斉の下校の際に、名前札や防犯ブザーの着用、チェックを確実にしている。 ・自転車に乗る際には必ずヘルメットをかぶることを義務として定着させた。	（成果） ・自転車に乗る際のヘルメット着用はPTAの協力の下、義務としての定着がしっかりとできてきている。 ・名前札、黄色い帽子、防犯ブザーの携帯等については、児童も高い意識を持っている。 （課題） ・名前札の「あ」については、どの児童にも等しいと意味を伝えることができる。 （改善策） ・名前札、黄色い帽子、防犯ブザーについては、保護者にもその大切などを話し、携帯するよう声をかけをもらうよう依頼をする。
5子どもへのまなざし運動と市民性を育む教育を推進する								
領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方法	担当	評価及びその理由	成果と課題	
教育活動	○特別活動1	児童会活動の充実	・代表委員会で決めたことについて、一人ひとりが出番・役割を意識しながら意欲的に取り組むことができる。	・議題順の活用について、集会や放送で呼びかける。 ・代表委員会で決めたことについて、 ・代表委員会で決めたことについて、運営委員会が中心になって全校児童が活動しやすいように伝える。 ・一人一役の出番・役割を持たせ、頑張ったことを承認する。	すこやかな育ち部（生徒指導主任）	B	・代表委員会の前には、クラスや委員会からの提案が多くあり、その提案をもとに代表委員会を開き、学校の生活を楽しくさせるための活動ができている。それらの学級等の実態を把握していることで、要望等に即応し、代表委員会には学校の担い手必ず参加することで、代表の児童が安心の気持ちを持って参加できている。	（成果） ・全体的に運営委員会や各委員会がよく活動できていた。児童アンケートでも、95％程度の児童が、よく取り組んでいると感じている。体育大会やいすず祭などの大きな行事の取組の中で「承認メッセージ」の活用が、大きな役割を果たした。一人ひとりに出番・役割を持たせ、一人ひとりに責任をもち、一人ひとりが活躍の場をもち、一人ひとりが

教育活動	○特別活動2	環境教育の充実（環境ISO）	・90%以上の子どもが環境をやる行動をすることができる。	・環境委員が中心となって、各学年の毎週の取組状況を伝える。 ・学校での取組の様子を地域・家庭に機会あることに発信する。	すこやかな育ち部（特活主任）	A	・環境委員会が中心となって6月にキックオフ宣言をした。毎週、各学年で、節約をめあてにした「できたかなボード」を使って、環境に関する取り組みができたかをチェックすることができた。その結果を、放送で全校に伝え、取り組みへの呼びかけをすることができた。来校審査においても「優良」という評価をいただくことができた。 ・12月のフリー作戦については、各学年に呼びかけ、校舎美化に全校的に取り組むことができた。 ・あさがおやゴーヤの栽培を通してグリーンカーテンの取り組みの呼びかけをすることができた。 ・平和集会の一員として、「平和の種をまこう」のテーマの下で、運動場のネット沿いに可憐なコスモスの種を蒔き、見事に咲かせることができた。地元の方々からたくさんのお褒めの言葉をいただくことができた。 （成果） ・環境委員会が中心となって6月にキックオフ宣言を行った。4・5月の久保泉小の実態を紹介したり、「できたかなボード」の記入について説明したりして、全校に呼びかけることができた。毎週でできたかなボードを各クラスでチェックしてもらい、実態状況を環境委員会が把握し、放送で結果を報告したり、取り組みの継続を呼びかけたりすることができた。 ・全校児童が参加し、活動がうまくできた12月のグリーン作戦は、環境委員を中心に資源物の分別を行った。 ・グリーンカーテンの呼びかけに応じて、朝顔とゴーヤの種を蒔いて、グリーンカーテンに取り組んだ学年もあり、全校児童への意識づけになった。 （課題） ・環境委員が時々でしかかなボードの回収や放送を忘れてしまうことがあった。（委員会ボードに当番を書いたり、事前に置きかけをしだしたら、忘れないようになってきた。しかし、徹底はできなかった。） ・地域や家庭に向けて、積極的により良い情報を発信する。（改善策） ・環境委員が自分の仕事に責任持って取り組めるように、係をきちんと分け、仕事内容を徹底させる。また、当番表等を作成し、意識づけをする。 ・環境委員会で、できたかなボードの結果や、学校での環境に関する取り組みについて、学期に1回くらい地域や家庭に情報を発信する。 ・校舎の工事で、学級舎がなくなり、スペースを活用して花壇や畑の造成を図る。
	○地域連携	まなざし運動と市民性を育む教育の充実	・地域のまなざし運動と連携し、市民性を育む教育（総合的な学習を中心）を充実することによって、市民の一員としての意識の向上をめざす。	・地域等に頻繁に出向き、市民性を育む視点で地域の人・団体・施設と交流を密にし、考え方や生き方を学ぶ。 ・生活科・総合的な学習の時間では、まなざし運動を展開する地域の人・団体・施設と年に2回以上は連携する。（久保泉公民館、桂寿苑などの福祉施設、地域ボランティア団体、えひめあやめ保全会、佐賀野鳥の会、JA青年部、長寿会等）	教頭	A	・全校や学年の活動を通して各種団体との連携を密に行い、地域の人・団体・施設と協力して交流や活動することができた。その結果、児童の学習や体験活動においていかにできるかを意識し、活動の質を高めることができた。学校評価アンケート（保護者）の結果では、1回目も2回目も「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が95%を超えていた。 ・児童のアンケート結果でも「楽しく勉強できた。」と答えている児童が95%を超えていた。また、子どもたちの参加しての感想や交流の様子（写真や作文等）からも、真実の目標に沿った意義ある活動を見ることができた。 （成果） ・計画的な交流活動として、地域の人や団体、施設とどの学年も連携を図ることができた。1・2年は幼稚園、保育園との交流会、長寿会との音遊び、3年は桂寿苑や公民館との交流や地域の学習、4年は「えひめあやめ保全会」との交流や体験活動、5年はJAや生産組合、特別非常勤講師との連携等年間を通して計画的に行うことができた。 ・「いすみまつり」では、多くの地域の方が参観され、200名以上の保護者や地域の方が参加し会を盛り上げていただいた。「歩こう走ろう会」は学校であるが、PTAの協力の下、地域の方等とも交流し楽しい活動ができた。公民館との関係も密になり、協力や連携をさせていただいているので、地域（久保泉）の特性や良さを子どもたちが実感でき、ふるさとを愛する取組を行うことができた。 （課題） ・地域の人、団体、施設との連携・交流で、思いやり等の豊かな心が育ち、地域の特色を知り関心も持つことができた。しかし、市民性を育むためにはどのような活動や取り組みが必要か（社会体験活動）などをおさえた活動を取り組もうと目標やねらいをきちんと立て、全職員で共有化を図って実施する必要がある。また、学校も連携する施設・団体も無理のない交流になるよう心がけて活動を行う。 （改善策） ・「市民性を育む教育」という視点で生活科や総合的な学習の年間計画の見直しを行い、地域等に出向いての社会体験活動等を積極的に行う。新しい地域連携活動を行う場合は、他の活動やなくしたり、簡素化したりする必要性もある。 ・「市民性を育む」とはどういうことか、「市民性を育む」にはどのような活動を仕組むべきか等、教職員の共通理解を図るための話し合いを定期的に行う。

⑥本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	担当	評価及びその理由	成果と課題
学校運営	○学校経営方針の周知	本年度の学校教育目標・経営ビジョン・重点目標の周知徹底	・保護者、児童、教職員、学校評議員、地域の方々に周知徹底し、認知度95%以上をめざす。	・学校教育目標を校内の目立つ所に掲示をし、意識の向上に努めさせる。 ・児童には、全校朝会での校長先生の話や学級担任の話等で機会あることに知らせる。 ・保護者には、学校パンフレット、学校便り、ホームページ、PTA総会、学校評価アンケート、学校評価ダイジェスト版等で周知する。 ・教職員には、職員会議や三部会等での活動を通して共通理解を図る。 ・学校評議員の方へは、評議員会、学校便り、学校関係者評価のための資料提供等で周知する。 ・地域の方々には、学校便りやホームページ等で周知する。	校長・教頭	A	・学校の行事やイベント等機会ある毎にPTA総会や学校懇談会、学校便り、ホームページ等で周知し、内容を説明した。その結果、学校が教育方針を伝える努力をしていると知っている保護者は、90%以上であった。児童のアンケートでは、2回とも「3つのあ」（あいさつ・あなせん・ありがとう）の周知率がほとんど100%であった。また、「学校便り」やホームページなど、適宜に保護者や地域の方へ発信できており、学校の経営方針や重点目標は周知できていると考える。学校としての説明責任をしっかりと果たすことができている。 （成果） ・具体的方策で計画していたこととして、学校パンフレット、学校便り、ホームページ、PTA総会、学校評価アンケートの配布など、計画的に実施することができた。その結果、保護者や学校評議員等にも「学校の経営方針・重点目標」などの周知徹底を図ることができた。 （課題） ・学校便りや、ホームページ等、色々な方法で、学校の「経営方針・重点目標」を保護者や児童、地域に伝え、周知を図っているが、まだまだ、改善する余地があると考える。保護者や地域の方から見えていただけるように情報発信の内容や方法に工夫が必要である。 （改善策） ・地域等に「聞かれた情報される学校」を目指して、取組を行う必要がある。保護者や児童、地域が学校目標に関心を持ち、足を運んでいただき、目標周知率がさらに高まるようにしたい。また、保護者や地域の方、学校評議員の方が気軽に学校へ来校して参観したり、意見を提言できたりするような雰囲気や環境を作る。

6	総合評価	・本年度は「学校教育目標の周知徹底」、「読書活動の充実」、「ICT利活用教育の推進」、「事故0の達成」、「人権教育の充実」、「まなざし運動と市民性を育む教育の充実」等において、十分な成果をあげることができた。しかし、すべての児童や保護者の意識や行動を確実に改善するまでには至っていない。また、「学習習慣と学力の定着」（学力向上1）や「児童会活動の充実」等、3部会で話し合いを行い、新たな取り組みとしての改善策を講じていく必要がある。 ・学校評価検討委員会、学校評価として取り組むべき意義のある評価項目であるが協議した。三部会や分掌事務担当者毎学期の振り返り（成果や課題）を報告したため、教職員全体への周知徹底や共有化ができた。また、評価項目についての総括を行い、その都度、改善や修正を行って取り組みを行うことができた。 ・保護者や児童のアンケートについては必ず全体で協議し、修正や改善を図った。併せて評価の妥当性を高めることができた。
7	来年度の改善策	・読書学習教育の一員としての自主的実践として、プロジェクトの機能を生かした月に1回の「3部会」を計画的に行い、本年度の課題を改善して成果を更にあげる。「PDCA」のサイクルとして、教職員の意見やアイデアを取り上げて主体的に取り組ませたりすることが必要である。また、地域等への「聞かれた学校作り」を目指し、保護者や地域の方の意見や思いを取り入れるために「アンケート」（学校関係者評価等）や「フリー参観日」の感想や意見を全職員で取り上げ、共通理解を図って共有化を行う。 また、本年度に「B」と評価した項目については下記のような改善策（取り組み）を行う。 ①学習に関心を持てる上での学習習慣の定着と学力向上については、「考えたこと」「考えたこと」を確実に振り返ることのできるノート作りを徹底させる。下位児童の基礎学力向上のためのスキルを毎日の学習に取り入れる。 ②「児童会活動の充実」のため、児童がより自主的に取り組むように議題箱の活用を全校に呼びかける。また、一人一役の出席を持たせ、頑張った事をまとめて承認して自信を持たせる。 ③特別支援教育の充実のため、「発達障害」や「特別の支援を要する児童」の障害理解のため、巡回相談員や専門家を招いての講話や事例研究会を実施する。 ④基本的な生活習慣の確立について、本年度も家庭での習慣化はアンケート等の結果からみると十分でない。家庭との連携や啓発を図る必要がある。手を洗う必要性等について、機会あるごとに保護者へ啓発していきたい。また、「まなざしカード」や「読書学習メソッド」も効果的に活用する。 ⑤「まなざしカード」や「読書学習メソッド」も活用しての「学習習慣の育成」については、学級便り等を通して、さらに各家庭に協力をお願いする。よい話の聞き方が身につくように、引き続き繰り返し指導を行う。 ⑥環境教育の充実については、日々の学校生活の中で意識するように学級担任等で指導し意識化を図る。また、全校的な植樹等々の環境教育の実践に関する効果的な学習や体験活動を実施する。 ⑦地域と学校との連携を図るために、頻りに地域等に出向き、学校の意向等を伝える。また、学校の課題を探り解決していく上でも、地域の現状をつかみ、地域の課題等を学校でも共有できるような働きかけをしていく。

●は共通評価項目 ○は独自評価項目